

高橋美野梨著 (明石書店、二〇一三年)

『自己決定権をめぐる政治学』

——デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」——

山本博之

国民国家を政治分析の基本枠組とする立場では、国内の特殊な特徴を持つ地域の事例は例外として切り捨てられるか、あるいは国家の相対化を目的として自治・分権化が研究されるかのいずれかであり、そのいずれによってもグリーンランドという地域を適切に理解することはできない。これが本書の基本的な主張である。前者では、たとえば、グリーンランドに米軍基地が置かれ、核が配備されていたにもかかわらず、その時期を含めてデンマークは「外国の基地をおかず、非核の立場が認められた」国として語られる。後者では、「周縁」とは常に「中心」に対する対抗概念としてのニュアンスを伴いながら自治を求め

ていこうとする存在であり、したがって常に「中心」を経由してしか国外と関係を持たないとされ、ヨーロッパ共同体(EU)にデンマークが加盟したままグリーンランドがEUを離脱したことがうまく理解されない。このような認識のもとに、デンマーク領グリーンランドが「対内的自治」を高めることなく「対外的自治」を高めてきたというのが本書の中心的な議論である。

グリーンランドは、デンマーク国内で周縁としての地位に甘んじながら、国際的な交渉においては目を見張る実績を挙げている。著者はこのことに共感を抱きつつも、それをグリーンランドの政治的未熟さによって語ったり、そも

そもグリーンランドが対外的自治を高めていたように見えるのは本土デンマークが与えたのであってグリーンランドはそれを受け入れたに過ぎないと見たりするのではなく、デンマークをめぐる国内的・国際的な政治環境に対してグリーンランドが自らとデンマークをうまく適応させようとしたと見ることで、グリーンランドの主體的な選択の結果として説明しようとする。「国家―地方」あるいは「中心―周縁」という観点では一地方の事例はせいぜいそれが所属する国家の相対化にしか繋がらないが、本書はそれを通り超えて地球規模で国家や自治・分権化を相対化する契機を与えたいという大変野心的な研究である。

本書は、問題の背景や分析視角の整理（序章から第二章まで）、本論（第三章から第八章まで）、終章の一〇章構成をとる。章ごとの内容をごく簡単に紹介しておこう。問題の背景は既述の通りで、分析視角としては、自治を「対内的自治」と「対外的自治」に分け、また、「デンマーク国家」と「本土デンマーク」を分けて捉えている。第三章ではEC加盟およびグリーンランドのEC離脱（域外化）について、第四章では米軍基地の駐留と爆撃機墜落事故で明らかになった核の持ち込みについて、第五章では攻撃性を伴うミサイルを配備した上でのアメリカとの防衛協定の締

結について、第六章では北極海域の領有権画定と資源開発についての事例を検討する。第七章ではこれらの結果が二〇〇九年自治法によってデンマーク憲法に位置づけられたことについて、そして第八章ではその背景として本土デンマークのグリーンランドに対する「法外な善意」についてそれぞれ検討している。終章では「対内的自治」と今後の行方を考察している。

本論のいずれの章も地球規模の政治環境をグリーンランドという国内の一地域に映して描くもので、東アジアを含めた今日の世界の課題を考える上でも示唆に富む。また、評者の個人的な関心に引きつけるならば、世界最大の島であるグリーンランドの経験は、面積世界第三位のボルネオ島に位置し、評者が関心を持つマレーシア領サバ州の自治・自立を考える上でも重なる部分が多い。デンマーク憲法で認められたグリーンランドの権利として挙げられる非生物資源の所有権、非生物資源の収益分配率、グリーンランド語の公用語化、独立権の承認（第七章）は、マレーシアにおけるサバ州の自治・自立における課題と奇妙にもほぼ一致している。

本書が他地域の事例を考える上でも有意義であるがゆえに、特に第八章の「法外な善意」についての議論のように、特に第八章の「法外な善意」については再考の余地があるのではないだろうか。また、デンマーク／グリーンランドを理解する上で「中央―周縁」にかわる枠組みとして「対内的自治」と「対外的自治」を分けて捉える枠組みがなぜ有効なのかは本書を通じて十分に示されているが、なぜその枠組みでなければならないのかについてはなお説得力を高める余地が残されているように思われる。この点が十分に明確に示されないこと、「その枠組みでもいいが従来の枠組みでもいい」となりかねない。このことを指摘した上で、それにもかかわらず著者があえて本書で上記の枠組みを提示した理由を想像するならば、研究対象地域の人々とともに暮らし、ともに考えた中で浮かび上がってきた地域社会の視角を著者なりに掘り上げ、それを研究成果として表現することで学術研究の分野でデンマーク／グリーンランドを世界に繋げたいという著者の思いが伝わってくる。このことと関連して、デンマーク／グリーンランドに対する著者の眼差しがよく表現されていると思われるため、本書に挿入されている地図について一言触れておきたい。

に、さらに詳しく知りたいという印象を受ける部分もあった。たとえば、第八章では本土デンマークのうちグリーンランドの自治に否定的な立場を取る存在としてデンマーク国民党を挙げ、この党を「ナショナル」なものを守る政党としている。グリーンランドが「対外的自治」を強めながら「対内的自治」を強めようとしないうち著者の議論は、グリーンランドが「対外的自治」を強めようとするのはデンマーク国家の一員として国家全体の立場を強めようとするためであり、したがってその意味においてデンマークの「ナショナル」ものを維持発展させようとする意味を持つという主張であると理解できる。本書では国民党の影響力は大きくないとしてあまり論じられていないが、地方の自治を高めることが「ナショナル」ものを維持発展させるといふ議論を深めることで、デンマークの事例を離れた「ナショナル」ものの検討にも繋がりをえたように思われる（なお、細かいことになるが、「法外」には「誰でも認める基準に外れたこと」という意味とともに「法に外れていること」という意味もある。本書で紹介されるグリーンランドの事例はいずれもデンマーク国家が承認して（法に則って）行われていることに意味があるように思われる。法に外れた対応であるとの誤解を与えかねないという点で、「法外な善

ものごとは誰がどの立場で見えるかによって異なる姿を見せる。そのため、デンマーク／グリーンランドを理解するにはどこにどう目を向けるべきかについて本書はかなり意

識的であり、そのことを読者にも経験させ考えさせる仕掛けをいくつも施している。わかりやすい例は本書三一頁に掲載されたイラストだろう。グリーンランドがデンマークに統合された一九五三年に風刺誌に掲載されたこのイラストでは、教室で教師が黒板に大きな地図を掛け、棒で地図を指して児童たちに説明している。「新しいデンマーク地図」と題された地図は、そのほぼ全面をグリーンランドが占め、本土デンマークは右下の一〇分の一ほどの囲みでしかない。このイラストは、グリーンランドがデンマークの一部となったことで、本土デンマークの子どもたちが自分たちに馴染みのない土地の地図を自分の国だと教えられていることの戸惑いがよく表現されているとともに、グリーンランドと本土デンマークを同じ縮尺の地図で示すことで、面積の大小と認識上の重要性が比例しないのはなぜなのか（それは妥当なのか）を読者に考えさせる仕掛けにもなっている。

地図を通じて読者に問いかける仕掛けは本書全体とも関わっている。本書は冒頭にグリーンランドの地図（一三頁）および北極点からの俯瞰図（二四頁）を載せている。

一四頁の地図にはグリーンランドとヨーロッパと北極海の三つしか地名が記されておらず、注意して見ないと陸地と

を得ないけれどその地域の当事者にとって意味のある情報がある場合、それをすくい上げて地域の文脈に照らして意味を汲み取ることで、型に従った理解を再検証してより有意義な理解に組み直すことができる。これが地域研究の意義だとすれば、地域研究は伝統的な学問的デイシプリンの型を踏まえ、それをさらに豊かにする営みである。本書はその意味で政治学であるとともに地域研究のすぐれた著作であり、地域研究コンソーシアム賞を受賞したことは喜ばしい。著者のデンマーク／グリーンランド研究が今後さらに政治学の分野でも高く評価されることで政治学と地域研究がいつそう発展することに期待したい。

海洋の違いもわかりにくい。この白地図同然の地図の意味を読者は後に再認識させられる。一四頁の地図にアメリカとソ連の位置を記し、冷戦時代の早期警戒システムを描き入れた一三八頁の地図では、アメリカとソ連が北極点を挟んで対峙しており、そのほぼ中央にグリーンランドがあることが示される。私たちが見慣れた日本中心の世界地図では、多くの場合グリーンランドは二つに切られて地図の左右の端に置かれており、その意味でグリーンランドは日本人の認識の上で世界で最も周縁化された地域だといえるかもしれないが、アメリカとソ連は私たちが見慣れた地図のように東西に分かれて並んでいるのではなく、北極を挟んで正面から向き合っており、その中間点にグリーンランドが位置している。このことがわかると、一三頁の地図に米軍関連施設を記した一三七頁の地図の意味も浮かび上がってくる。さらに他の章の地図でも、北極圏の漁業や先住民の生活圏を考える上でもグリーンランドがきわめて重要な地域であることが示される。

伝統的な学問的デイシプリンには、どのような情報をどのように処理すると対象を理解できるかという学問分野ごとの作法（型）があり、それを身につけなければ基本的な情報の処理ができない。その上で、型に従えば落とさざる

●著者紹介●

- ① 氏名……山本博之（やまもと・ひろゆき）。
- ② 所属・職名……京都大学地域研究統合情報センター・准教授。
- ③ 生年・出身地……一九六六年、千葉県。
- ④ 専門分野・地域……マレーシア地域研究、混成アジア映画。
- ⑤ 学歴……東京大学教養学部、東京大学大学院総合文化研究科・修士課程（地域文化研究専攻）、東京大学大学院総合文化研究科・博士課程（地域文化研究専攻）。
- ⑥ 職歴……マレーシア・サバ大学講師（三二歳、任期二年）、東京大学教養学部助手（三四歳、任期二年）、在メダン総領事館委嘱調査員（三六歳、任期一年）、国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授（三八歳、一年半）。
- ⑦ 現地滞在経験……マレーシア（交換留学生、一七歳、一年間）、中国（語学留学、二〇歳、一年間）、マレーシア（研究所客員研究員・大学講師、二九歳、六年間）、インドネシア（総領事館委嘱調査員、三六歳、一年間）、フィリピン（大学客員研究員、四九歳、一年間）。
- ⑧ 研究方法……資料読みも街歩きも「端から端まで」「何度も繰り返し」を心がけている。調べ物があるときに直接の目的に達するには無駄が多い方法だが、何度か同じものごとを見かけるうちにつながりや意味が浮かび上がってくる。
- ⑨ 所属学会……日本マレーシア学会、東南アジア学会、アジア政経学会、日本災害復興学会。
- ⑩ 研究上の画期……フィリピンでの長期滞在。三〇年間馴染んできたマレー・イスラム世界を離れ、言葉も文化も未知の地域へ。四〇代で一から始める地域研究へのチャレンジ。
- ⑪ 推薦図書……ホセ・リサル「フリ・メ・タンヘレ」わが祖国に捧げる（岩崎玄訳、井村文化事業社、一九七六年）。フィリピン国民必読の小説。言語混成の作品社会を単一言語に翻訳しつつ原著の味を失わせない訳注の語りも見所の一つ。